

のりすぎかじゅ

乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年

—— その建学の精神の具現化と社会教育論の実践 —— (3)

橋 本 久美子

2-3 第2期 欧米視察から大東亜戦争前まで（昭和6年9月～16年12月）

第2期のうち、プリングスハイム退任以降を取りあげる。

2-3b 第2期b 音楽報国の時代へ（昭和12年8月～16年12月）

2-3b-1 第2期bのキーワードと特徴

この時期のキーワードを列挙すると、プリングスハイムの解任、ヒットラーユーゲント歓迎演奏会、ナチス推薦によるH.フェルマー着任、集団勤労奉仕、音楽報国レコード吹込、創立60周年、紀元二千六百年、銃後奉仕演奏会、社会教育論、社会と国家、音楽学校の存在意義と役割、乗杉嘉壽作歌等であろう。

これらが映し出すものは、まず時代の大きな荒波であり、次に学校と国家の不可分な関係ではなかろうか。国内唯一の官立音楽学校という特異な立場が東京音楽学校に独特の役割を担わせていく状況が想像されよう。

激動の時代に東京音楽学校はいかなる進路をとったのだろうか。翻弄されるままに抗うこともなく命運を波に委ねたのか、タイミング良く波に乗る道を選んだのか。時局と一線を描いたのか。難局において東京音楽学校の特色を保持し得たのか。学校運営のなかで建学の精神の具現化は継続されたのか、社会教育論的な実践は継続されたのか、どのような方向に向かったのか、第2期bにおける校長の舵取りとその結果の検証を試みる。

ここでキーワードの最後に挙げた「作歌」にふれておく。元来、和歌を作ることを意味する「作歌」という言葉が明治期の洋楽導入以降に洋楽及び新作邦楽などで用いられる際には、通常「歌詞を作ること」すなわち「作詞」の意味で用いられた。洋楽導入期には、西洋の声楽曲のほとんどが訳詞ではなく新たに作られた日本語によって歌われ、作詞ではなく「作歌」と表記された。この用法での「作歌」は昭和の戦後もしばらく用いられたが、次第に「作詞」に取って代わられた。なお明治40年頃から、音楽学校の演奏会における西洋の合唱や歌曲では、原語による演奏が増え始め、原語もしくは訳詞が主流となっていく。これに伴い「作歌」という語の出番自体が減るが、邦楽と日本歌曲の作詞に対しては引き続き使われていく。「作詞」の初出を特定するには至っていないが、東京音楽学校の演奏会で見ると、昭和10年頃には作歌も作詞も用いられ、演奏会ごとにどちらかに統一されている。乗杉の作歌として知

られるものは昭和10年代前半に集中し、その多くが「作歌」と表記されている。

乗杉作歌は、昭和11年6月の下總皖一作曲による《国旗掲揚の歌》から昭和18年9月の橋本國彦作曲による《英霊讃歌》まで14篇が知られる。第2期bには国民歌・軍歌・長唄・箏曲など9篇と、郷里富山県の小学校校歌1篇¹、それに歌詞のみ確認される1篇の計11篇を数える。乗杉作歌が意味するもの、彼が歌に託したものを考察する。

本稿ではまず、第2期bの出発点であるプリングスハイム退任を時代の側面から考察し(2-3b-2)、この時期の出来事と演奏会などを表にまとめて俯瞰し(2-3b-3)、乗杉の作歌を取りあげる(2-3b-4)。続いて東京音楽学校創立60周年(2-3b-5)にふれ、第2期bにおける建学の精神の具現化と乗杉社会教育論の行方を考察して(2-3b-6)、結ぶ(2-3b-7)。

2-3b-2 プリングスハイム退任とその時代

プリングスハイムは昭和12年7月末日をもって契約満期解任となった。

音楽取調掛のL.W.メーソンから60年来、外国人教師を雇い入れてきた音楽学校としては、プリングスハイムもその一人である。彼は、日本を取り巻く国際情勢に激震が走った満州事変の昭和6年来日し、事態がいつそう深刻化する廬溝橋事件12年7月に退職した。その6年間は東京音楽学校が音楽技術の向上を旗印に掲げて教育に専念し得た戦前最後の時期でもあった。プリングスハイムは日本に親愛の情を示し、作品に乗杉校長への献辞を記し、東京音楽学校のレベル向上に専心した。

プリングスハイムの解任について、当時の新聞雑誌報道も識者の見解も、彼個人の力量や成果云々に対する見直し、あるいは学校当局とプリングスハイムの折り合い、あるいは世間の批判に音楽学校が屈した等々に終始している。記事はその時代なりに相応の情報に基づいていたのであろう。通常でも6年間という在職期間は短すぎることはなく、別の指導者を迎えてもおかしくない時期ではある。しかしユダヤ人を父親に持つプリングスハイムの解任を今日から観れば、当時の国際社会のなかの日本、そして日本のなかの東京音楽学校という立場からの判断が全てに優先したということであろう。言い換えれば彼が東京音楽学校で活躍できた間、校長も外務省からの圧力に持ちこたえたのである。その意味でプリングスハイムの解任は、とりわけ日本の国情を映した象徴的な出来事であり、東京音楽学校が時代の節目に行った大きな決断の象徴であり、同校のその後の進路を暗示する道標として刻印されよう。

退任からわずか3ヶ月後の11月、東京音楽学校は防共協定成立記念日に出演し、翌昭和13年9月には奏楽堂にヒットラーユーゲントを迎えて歓迎演奏会を行った。同じ奏楽堂でプリングスハイムがマーラーの交響曲など32曲を日本初演し、自作の《管絃楽協奏曲》を世界初演し、7年7月には学校オペラ《ヤーザーガー》試演後の懇談会で文部大臣や批評家が音楽学校におけるオペラ復活の夢を語った一幕も過去のものとなった。とかく浮世離れた楽の学舎と思われがちな音楽学校であるが、「学校の社会化と社会の学校化」の唱道者＝乗杉校長

の采配のもと、唯一の官立音楽学校として時局を引き受けた東京音楽学校の場面展開は国情そのもの、いかにも目まぐるしい。

2-3b-3 昭和12年8月～16年12月7日まで²のおもな出来事

次頁の表は各年で大まかに事項ごとに分けて記載している。「洋楽」と「邦楽」の欄が横につながっているところは、当該演奏会で洋楽と邦楽の双方が演奏されたことを示す。また、ある項の記載内容が他の欄に比して極端に多い場合は欄の区切りを一時的に変更し、その旨を線の区切りで示した。各年の「規定・全校的な事柄」の終わりに乗杉の作歌を記した。昭和12年に《日本青年の歌》以下4曲、同様に13年に2曲、14年に3曲あり、いずれもストレートに時局を反映したタイトルが付けられている。15年の校歌は郷里の小学校から依頼されたものであろう。

次に事項を「洋楽」「邦楽」まで含めて見ると、国家的使命を帯びた全校的かつ対外的な演奏活動として、昭和12年の日独伊親善演奏会、13年のヒットラーユージュント歓迎演奏会、同じく13年の傷痍軍人慰問演奏会、出征軍人家族慰問演奏会、15年の紀元二千六百年奉祝会と関連の演奏会があり、その他にも銃後奉仕と慰問を冠して出張演奏と招待演奏の双方で行われている。16年1月の《海道東征》の全曲レコード吹込もその一環であろう。

東京音楽学校独自のあり方と姿勢を対外的に示した事項としては、昭和13年の邦楽と洋楽のレコード吹込があり、これを集団勤労作業として行っている。14年には銃後奉仕邦楽演奏会で乗杉作歌による箏曲が、全収益を国防献金として行われた。同年宮城前での御親閲、15年の「青少年学徒に賜りたる勅語」奉戴式などもあった。ここでついでに記しておく、東京音楽学校では少なくとも昭和以降、教育勅語奉読や御真影直拝も遙拝も行われず、それらを納める奉安殿も乗杉校長時代に募金の計画こそあったが実際に作られることはなかった。これらが行われた記録が無いことと、昭和初期以降の卒業生20名以上の聞き取り結果も一致していることからまず間違いなさそうである。16年2月に学友会が解散され、校長を团长とする報国団が結成されると、従来の学友会演奏会はすべて報国団演奏会となった。定期演奏会は従来通りで名称変更などはない。

乗杉校長の采配が見える事柄に、昭和14年の全生徒父兄の懇話会、全国音楽学校長会議を主催などが挙げられる。全生徒父兄会などは創立以来初めてのことで、乗杉校長でなければ発案すら無かったのではないだろうか。乗杉社会教育論においては、個人という単位が家庭・地域・社会・国家を形成していくこと、社会の基礎は家庭にあり、「社会とは共同目的を有する人格者をその要素とする有機的の団体である」³ことを想起したい。全生徒父兄会は、家庭を基礎に置き、学校と社会を結ぶ社会教育論の実践であるといえよう。もう一方の、東京府の私立音楽学校のみならず全国に呼びかけての校長会議は、各音楽学校が卒業生を輩出するなかで東京音楽学校の卒業生を全国の音楽学校に就職させていた事情もあり、東京音楽学校

年	規定・全校的な事柄	洋楽	邦楽	上野児童音楽学園	施設関連
1937 S12	11月 防共協定成立記念日日独伊親善演奏会に出演 乗杉作歌 《日本青年の歌》橋本國彦作曲、 《聖戦讃歌》東京音楽学校選曲、 長唄《皇軍必勝》吉住小三郎・ 稀音家六四郎作曲、箏曲《聖戦 讃歌》中能島欣一作曲	8月 第7回世界教育会議参列者招待演 奏会（邦楽と洋楽） 10、11、12月 第 100～104回学友会 10月 島根演奏旅行 11月 銃後奉仕	11月 邦楽 11月 銃後奉仕で 乗杉作詞《聖戦讃 歌》《皇軍必勝》	9月 防空演習 9月 尋常科父兄 会 11月 東音銃後奉 仕洋楽出演 12月 高等科父兄 会	
1938 S13	2月 傷痍軍人慰問演奏および 出征軍人家族慰問演奏会開催 3月 侯爵徳川頼貞よりペー トウヴェン青銅胸像一基及び参 考用楽器10数点寄付 4月 研究科の副科目修了試業 資格等に関する内規 5月 勅令361号により東音教 授22人を24人に助教授15人を16 人に 書記6人を7人に増員 9月 楽語調査促進のため楽語 調査掛職員を新たに任命する 11月 海軍委託練習生は第27期 以後40名に増加 11月 軍歌「皇軍讃歌」「国境の 守り」2曲を選定発表 乗杉作歌 《皇軍讃歌》平井保喜作曲、 《国境の守り》下總院一作曲	1月 研究生の演 奏会で永井進がラフ マニノフ《第二協奏 曲》 6月 第84回定期 7月 集団勤労作業として全校生徒の邦 楽並びに洋楽レコード吹込及び傷痍軍人 慰問演奏を行う 9月 ヒットラーユーゲント歓迎演奏 会＝邦楽、「独逸国家」「愛国行進曲」、ペー トウヴェン：ミサ曲、「君が代」 10月 戦傷軍人慰安演奏会（臨時東京第 三陸軍病院在院戦傷軍人） 10月 第85回定期 12月 銃後奉仕 12月 第86回定期	7月 日本劇場音 楽実演並解説 7月 海軍戦傷病 将士並海兵団将士 慰問演奏（横須賀 海軍病院と横須賀 海兵団音楽堂）で 乗杉作詞《皇軍必 勝》 11月 邦楽	3月 第3回卒業 式 3月 文部省主催 の「教育映画と音 楽の会」に出張演 奏 4月 第3回卒業 生演奏会 10月 第5回演奏 会 12月 銃後奉仕東 京音楽学校演奏会 に出演	3月 学友会より 生徒食堂及び雨天 体操場の寄付 4月 伊澤初代校 長記念碑を出生地 高遠町に建設 6月 上野児童音 楽学園より雨天体 操場木造平屋建て 及び事務室増築寄 付 9月 上野児童音 楽学園より教室、 練習室木造2階増 築、渡り廊下の寄 付 9月 女生徒控室 を模様替え及び拡 張 12月 本校敷地内 に寄宿舎木造2階 建、渡り廊下木造 2階建、同平屋建 の改築仮公布
1939 S14	3月 邦楽科第1回卒業生 4月 仏語伊語講座を新設 4月 邦楽科に能楽宝生流設置 5月 宮城前広場で本校職員生 徒代表12名が御親閲を受ける 5月 青少年学徒に勅語を下賜 5月 学風風紀振作委員会委員 会を設置 6月 青少年学徒に賜りたる勅 語謄本下賜され勅語奉戴式举行 6月 全生徒の父兄を召集し、 初の懇話会 6月 本校主催全国音楽学校長 会議開催 6月 初めて作曲及び指揮法担 任の専門外国人講師を招聘し外 国人教師講師計9人 7月 文部省主催興亜勤勞報告 隊に本校職員代表一名及び生徒 代表5名参加し渡満奉仕 7月 初めて女生徒の合宿訓練 8月 皇軍慰問の歌を制定 9月 興亜奉公日設定記念式を举行し奉公日行事を実施 9月 体操科の一部として女生徒に 薙刀術及び律動運動を課す 11月 皇軍慰問の歌レコードを作製頒布 11月 創立60周年記念 式を举行し各種記念事業と洋楽・邦楽演奏会を行う朝香宮湛子女王殿下台臨 11月 創立60周 年記念事業費として卒業生より寄付 12月 音声研究部細則を改正 12月 紀元二千六百年記 念東京市肇国奉公隊に参加し宮城外苑整備の為本校職員生徒勤勞作業 乗杉作歌《東京音楽学校創立六十周年記念歌》下總院一作曲、《東亜の黎明》安部幸明作曲、箏 曲《東亜の黎明》宮城道雄作曲、《皇軍慰問の歌》下總院一作曲	2月 第87回定期 6月 第88回定期 6月 習志野陸軍病院在院戦傷兵来校慰 問演奏会（曲目不明） 6月 広東訪日婦女団歓迎演奏会（曲目 不明） 10月 文部省主催芸術学会出席者招待演 奏会（洋楽と邦楽） 11月 第89回定期 （共立講堂） 11月 初めて四国地 方演奏旅行 12月 銃後奉仕（日 比谷公会堂）	1月 学友会第1 回邦楽演奏会 1月 銃後奉仕邦 楽演奏会（共立講 堂）乗杉作詞箏曲 《聖戦讃歌》《東亜 の黎明》等。全収 益は国防献金。 10月（日比谷公 会堂） 12月 銃後奉仕邦 楽演奏会を開催	3月 卒業式 4月 入園式。尋 常科82名、高等科 73名入園 5月 海軍記念日 参加。園田高弘が パヴァー《イタリア 協奏曲》第一章奏 を弾く 6月 尋常科及び 高等科勅語拝戴式 10月 尋常科第6 回演奏会 11月 高等科第1 回演奏会＝中田喜 直がペートウヴェ ンのソナタ変ホ長 調を弾く	9月 本校敷地内 に寄宿舎木造二階 建て69坪の増築仮 引継を受ける 9月 本校敷地内 に教室木造二階建 て21坪の増築仮引 継を受ける

年	規定・全校的な事柄	洋楽	邦楽	上野児童音楽学園	施設関連
1940 S15	<p>2月 東京音楽学校国民精神総動員実行委員会を設置</p> <p>4月 本校にて聖徳太子御忌法用</p> <p>4月 初めて外国人声楽教師として伊太利人を招聘</p> <p>5月 代々木練兵場に於いて青少年学徒に賜りたる第一回勅語奉戴式に参加</p> <p>5月 文部省令第26号を以て本校規程中改正</p> <p>7月 夏季集団勤労に於いて女生徒に初めて宿舎作業、参禅、園芸学校の作業等を課す</p> <p>7月 ハヶ岳修練農場に於ける文部省主催高等専門学校生徒集団勤労作業講習会に本校生徒4名参加</p> <p>7月 文部省派遣興亜学生勤労報国隊に本校生徒3名参加</p> <p>9月 初めて失明傷痍軍人の委託教授を開始</p> <p>9月 初めて音楽教授法特別講義を施行</p> <p>9月 初めて各校委託教育実習を行う</p> <p>11月 紀元二千六百年式典並奉祝会に本校生徒参加</p> <p>11月 新日本音楽並第二回交響作品発表演奏会、宮城道雄《祝典管絃奏曲》《寄櫻祝》、山田耕筰《神風》、信時潔《海道東征》</p> <p>12月 賀陽宮恒憲王殿下本校教練を御見学</p> <p>12月 紀元二千六百年奉祝楽曲発表演奏会（大阪）イペール、シャンドル、ピヴェッティ、R.シュトラウスの曲</p> <p>乗杉作歌 《校歌》（富山県東礪波郡出町尋常小学校＝現・砺波市立出町小学校）岡野貞一作曲</p>	<p>2月 第90回定期</p> <p>5月 總裁宮奉戴記念演奏会（大阪）《万博行進曲》発表</p> <p>6月 第91回定期</p> <p>9月 紀元二千六百年奉祝・銃後奉仕東北北海道演奏旅行</p> <p>10月 靖国神社の頌（陸海軍楽隊と）</p> <p>11月 関西地方に紀元二千六百年奉祝洋楽出張演奏会</p> <p>12月 銃後奉仕演奏会</p> <p>7月 東亜教育大会参加者参観演奏会《六段》《海ゆかば》《愛国行進曲》《交響曲 [橋本國彦作曲]》</p> <p>11月 紀元二千六百年奉祝演奏会 閑院宮春仁王並同妃両殿下御台臨</p>	<p>9月 選科に長唄舞踊科を新設</p> <p>9月 紀元二千六百年奉祝洋楽出張演奏（北海道・東北地方）</p> <p>12月 名古屋大阪方面演奏旅行（山田流箏曲《聖戦讃歌》を含む）</p>	<p>1月 箏曲科児童募集</p> <p>2月 AK（現NHK）出演</p> <p>3月 第5回卒業式</p> <p>4月 入園式。尋常科88名、高等科67名、研究科14名入園</p> <p>4月 尋常科第6回卒業演奏会</p> <p>6月 AK（現NHK）出演</p> <p>10月 尋常科第7回演奏会</p> <p>11月 高等科第2回演奏会</p>	<p>4月 上野児童音楽学園より教室として木造二階増築10坪の寄付</p>
1941 S16	<p>1月 紀元二千六百年記念日本文化中央聯盟制定交声曲《海道東征》全曲をレコード吹込</p> <p>2月 本校校友会解散並報国団結成式を挙行</p> <p>3月 朝香若宮妃千賀子殿下朝香宮湛子女王殿下卒業演奏に御台臨</p> <p>3月 勅令を以て事務官の官制公布され技手は専任二人となる</p> <p>7月 文部省派遣興亜学生勤労報国隊に生徒3名参加</p> <p>9月 本校報国隊結成式</p> <p>9月 失明傷痍軍人の委託教授を開始</p> <p>9月 本校職員生徒一同より防空壕構築の寄付を受く、深さ15尺面積約14坪、壕内は栗、檜材にて組立つ</p> <p>10月 専門学校の修業年限臨時短縮に関し勅令及文部省令公布</p> <p>12月 賀陽宮恒憲王殿下教練査閲官として御台臨</p> <p>12月 失明傷痍軍人の依託教授ピアノ調律一名増員す</p> <p>12月 研究科臨時学則を定む</p>	<p>2月 第92回定期</p> <p>2月 ヴェルディ作曲《レクイエム》を全曲放送</p> <p>3月 「皇后陛下御誕辰奉祝歌」をレコード吹込</p> <p>4月 報国団結成記念演奏会</p> <p>5月 診療報国之夜（帝国女子医専主催）</p> <p>6月 第93回定期閑院若宮殿下李鍵公並同妃殿下御台臨</p> <p>9月 北白川宮永久王殿下を偲ひ奉る会に出演</p> <p>10月 第94回定期</p> <p>10月 関西洋楽出張演奏、久邇宮静子王妃殿下御台臨</p> <p>11月 李鍵公殿下同妃殿下銃後奉仕洋楽演奏会に御台臨</p>	<p>2月 銃後奉仕邦楽演奏会</p> <p>5月 報国団結成記念第8回邦楽演奏会</p>	<p>4月 国民学校令の公布に伴い、尋常科を初等科と改称</p>	<p>1月 上野児童音楽学園より寄宿舎洗濯場干場木造平屋建10坪6合2勺5分及彌生寮増築平屋建1坪1合2勺5分の寄付</p> <p>8月 上野児童音楽学園より生徒控室木造平屋建17坪1棟の寄付を受く</p>

が各校と意思疎通を図り、連携を円滑にする必要もあったのであろう。しかしそのことも含め、音楽学校長が一堂に会し、時代認識を共有し、音楽教育界をともに担っていくことを相互に確認した意味は小さくなかったものと考えられる。

時局を映した事柄が並ぶなかで目立たないが、教育の充実も図られ、13年5月、14年6月、15年4月、16年3月に教職員の増加が記されている。

2-3b-4 乗杉嘉壽作歌

「乗杉嘉壽作歌」は以下の点で重要である。まず、東京音楽学校長の作歌であるという社会的な意味、そこに彼のメッセージを聞き取ることができる点は言うまでもない。加えて、彼のメッセージが、それまで音楽学校生への訓示として口頭で、あるいは同窓会誌などに印刷物として示されるに留まっていたのに対し、歌詞として歌われることで音楽学校の門を出てより広い範囲に届けられる、社会教育論の新しい形式による実践という点である。そして何より重要なことは、乗杉の言葉が音楽シーンの中で歌（唄・謡）われたことであろう。本稿では《日本青年の歌》、長唄《皇軍必勝》、軍歌《国境の守り》、箏曲と斉唱に共通の《東亜の黎明》を取りあげ、彼の作歌全体については稿を改める。

《日本青年の歌》 橋本國彦作曲 『同声会報』昭和12年7月

- (1) 山をも抜かむ力こそ 世をも^{おほ}蓋はむ^{きしろう}気尚こそ 我等が^{しるし}表徴高く掲げむ
いざいざ我等日本青年 いざいざ我等いざ共に
- (2) 艱難人を玉にせむ 希望と^{ひかり}光明見つめつ、 我等が^{ゆくて}前途拓き進まむ [以下(1)に同じ]
- (3) 祖先の遺風うけつぎて 人にも世にも^{かがみ}鑑なる 我等が^{みき}操を守り育てむ [以下(1)に同じ]
- (4) 事成るまでは^{ももたび}百度も 生きては^{しめい}尽す国のため 我等が^{しめい}使命振ひ果さむ [以下(1)に同じ]

楽譜は7月に発表され、8月にお披露目となった。SPレコードに録音された橋本國彦の作曲は、力強かつ小気味よい軽快さで、歌詞の一節ごとの強調点と気分をいっそう高揚させる。昭和12年8月25日付『讀賣新聞』は「日本青年の歌 乗杉音楽校長の作」という見出しで校長の写真入りの記事を載せ、「非常時下の日本青年の心掛けはかくありたいと」乗杉氏が「同校教授橋本國彦氏に作曲せしめて発表、自費でこの楽譜一万部を印刷して廿四日各府県学務部長、師範学校、軍隊、青年団などに発送普及させることになった」「青年の“意気”と“力”と“徳操”と“使命”とをそれぞれ四節にして力強く歌つたものである」と報じた。

4節に込められたメッセージと音楽学校における教育方針との関連はないだろうか。校内の訓示では当時の細則の一つ「生徒心得大綱」がいくども取りあげられ、「報国奉公」「和協敬愛」「自律独創」の3項目が諄々と説かれ、このうち第3項だけは他校にはない音楽学校の特色であるとされる。たとえば12年7月の終業式では、国民の一員として音楽をもって報国

奉公の実をあげよ、芸術家は和を心掛けることによって社会を明朗にし向上させよ、音楽家は自律的でセルフメイドマンの力を涵養することが在学中の修業の大眼目である、と⁴。生徒心得大綱は言葉上は「日本青年」へのメッセージと異なるように見えるが、音楽学校の至上命題である報国奉公を実現するためには、師弟友人関係など縦横にふさわしい節度をもって学び、気概をもって音楽修業で自分を磨かねばならない、という内容となる。よって4節は、乗杉が日頃接している東京音楽学校生に折々の訓示を通じて向けられていた内容と共通するもので、むしろ東京音楽学校での日々から発想されたということもできよう。

青年団の活動と教育は乗杉社会教育論において重要視され、かつて文部省社会教育課時代の彼は青年団の教育にも力を注いだ。その活動が実を結んだものか昭和10年の青年学校令により修業年限2年の青年学校が生まれ、学科目中に音楽科が置かれた。音楽学校長となった彼は、青年学校の実現は十年遅れた感ありと述べる一方で、音楽文化こそ「国民精神の確固なる原動力」であり、「情操陶冶に最善を尽くすべきの時」に「学科目中に音楽科が堂々と肩を並べて明記されていることは正に留飲の下がる思がする」と記した⁵。

長唄《皇軍必勝》 吉住小三郎・稀音家六四郎作曲 『同声会報』昭和12年10月（以下はレコード付属の歌詞による）

本調子／夫れ義は泰山よりも重く命は鴻毛よりも軽しとかや△武士の△訓伝へて凡幾年△心魂すでに凝つて百鍊の△凛々たる鋼の雄心△鏗鏘と鳴る神の△稜威の大君神ながら△仇なす敵はくじくとも△慈しむべき事な忘れそと宣らす詔の御恵の△秋つ島根の外まで流れ△仇国人にも漏すなき△無礙光明の大慈悲心を上に頂く無敵の皇軍△攻むるといふも聖戦打つといふも正戦△連戦△連勝△勝つに不思議はなかりけり。

二上り／四方の海△みなはらからと△思ふ世になど波風のたちさわぐらむと宣る△大御心の尊さよ△扶桑の高木東の△洋に影さして△波も静かに吹く風も△枝を△鳴さぬ△和楽の時に万国民△廻りあふこそ楽しけれ△廻りあふこそ楽しけれ。

レコード付属の乗杉自身による「皇軍必勝『解説』」には、「これまで我が国が一度戦へば必ず勝利をおさめないといふためしはなかつた事は…（略）…理にさからつた戦を、我から挑むといふためしは、嘗て一度もなかつたからに外ならぬ」とあり、皇軍は戦のうちにも広大無辺の愛を包蔵し、平和のために剣をとるものであることを今更に感じ、「仇なす～忘れそ」と「四方の～たちさわぐらむ」は明治天皇御製であると記されている。

長唄《皇軍必勝》は、東京音楽学校邦楽の演奏会のほか、各地の出張演奏や慰問演奏でも繰り返し演奏された。作歌の内容は、当時の識者のみならず多くの国民の思いでもあっただろう。しかし乗杉の従来発言や姿勢を念頭に置けば、彼が一般論を無批判に受け売りすることは考え難い。むしろそれを主体的に自分の言葉で語り、音楽によって国民を善導したい

という思いも働いたのではないか。たとえば次のような学校長告示がある。「顧ふに音楽は人格を完成し社会を醇化し大にしては国民精神の根底を培養し一国文化の光彩たり」⁶。これが音楽についての乗杉の信念であるとすれば、作歌は音楽学校長としての音楽報国の実践ではないかと考えられるのである。作歌は彼にとって御奉公であり、国恩に報いる以外の何物でもなかったであろう。第2期bにおいて乗杉社会教育論の実践は時局に鑑み音楽報国へと収斂しつつあったといえよう。

《皇軍必勝》をまずは当時の時代感覚に照らして吟味する必要があるが、戦前全否定と封印の時代を経て事実の伝承すら危ぶまれている戦後65年の状況下、《皇軍必勝》の歌詞が当時の国民感情にどれほど合致するものであったか、違和感があったか想像することすら難しくなっている。しかしこの長唄が当時どのように受け入れられたかを想像する場合、たとえ当時の権威ある東京音楽学校長作歌とはいえ、不評ならば何度も演奏されることはなかったと考えて良いのではなかろうか。実際、聴き応えも味わいもある佳品であり、当時の彼の信念と善き思いのままに事態が展開していれば、その後も生き残る作品になったかもしれないのだが。

軍歌《国境の守り》下總皖一作曲

- (1) 暴虐ソ連の侵入は などが神人許すべき かねて備えし皇軍の 下す鉄槌一撃に うちくだかれしあはれさよ 守りは堅し張鼓峰 誉れは高き正勇峰
- (2) 戦車幾百あまつさへ 空より掃射浴せかけ 機械の力尽しつゝ 攻むるを防ぐ我軍は 正義の心を一筋に 守りは堅し張鼓峰 誉れは高き正勇峰
- (3) 攻むるに堅く守るには 尚更難きこの陣地 死守の命令あくまでも 守る将士の心こそ 悲壯の極み世の鑑み 守りは堅し張鼓峰 誉れは高き正勇峰
- (4) 皇国の光^{みくに}いや高く アジヤの空に照りはえん 益^{ますらたけお}荒猛男のいさをしは 護国の神の神わざと 幾千代かけて伝へまし 守りは堅し張鼓峰 誉れは高き正勇峰

『同声会報』第245号（昭和13年9・10月）にまず歌詞が掲載され、生徒一般から曲を募集するとあったが、次号に下總皖一作曲で掲載された。

昭和13年7月から8月にかけて満州国東南端の張鼓峰で起こった日ソ国境紛争が張鼓峰事件である。日本側は張鼓峰の頂上は満州領と解釈し、ソ連側は国境が張鼓峰の頂上を通っているとし、双方の主張が異なっていた。ソ連軍が張鼓峰に進軍したのを撃退するため、日本軍はソ連の半分以下の戦闘兵力で、敵の狙撃師団、沿海集団飛行隊、機械化旅団に苦戦したが、夜襲作戦などが功を奏し、8月11日の停戦合意により、ソ連が張鼓峰から撤退することで決着した。張鼓峰は8月18日に正勇峰と改称される。なお事件に先立つ7月14日、紀元2600年に開催予定だった万博と東京五輪の返上が商工省で決定されている。

《国境の守り》は、銃後の歌によって戦線の兵士を支える心意気から作られたものであろう。時代を遡れば明治期には音楽学校の国語の教員にとっては、作歌は重要な任務の一つであった。乗杉が“歌の伝播力”をどの程度に想定していたのか、それについての彼自身の見解を知ることは難しいが、作歌という行為は、言葉を音楽によって幾重にも増幅する可能性を持つものであろう。第2期bは乗杉が作歌という、音楽と相携える方法を手に入れたことにより、彼のいわば“憂国と愛国の社会発信”に拍車がかかったように見える。“作歌による音楽学校長の社会化”とでも言えようか。曲はハ長調、2分の2拍子、「行進曲風に」である。

《国境の守り》から想起されるのが、日清戦争当時、音楽学校で国語を教えていた元壬生藩士の鳥居忱が「むすんでひらいて」の旋律に乗せて作歌した《戦闘歌》である。「(1)見渡せば寄せて来る敵の大軍面白やスハヤ戦闘始まるぞイデヤ人々攻め崩せ弾丸込めて撃ち倒せ敵の大軍撃ち崩せ (2)見渡せば崩れ懸る敵の大軍心地よモハヤ戦闘勝なるぞイデヤ人々ひ追ひ崩せ銃剣付けて突き倒せ敵の大軍突き崩せ」 この戦闘的な歌詞が校内の演奏会で歌われた形跡はないが、明治28年に出版された⁷⁾。ともに愛国心と使命感から作歌されたであろう《戦闘歌》と《国境の守り》であるが、日露戦争と張鼓峰事件とでは時代の状況が大きく異なる。今日それらを軽々に比較も論評もできないが、言えることは、《国境の守り》が作られた当時の日本では、張鼓峰事件はまだ日清・日露の延長に考えられており、3年4ヶ月後に始まる戦争も7年後の結末も、誰も予想していなかっただろうということである。

《東亜の黎明》

- (1) 光り輝く黎明の 恵を呼ぼう人の声 今も昔に異ならず 光よ来れ東より
- (2) 西に道義の影消えて 迷へるままに民老いぬ あはれ求むる声かなし 光よ来れ東より
- (3) 日出づる国の若き民 ^{おほみことりの}大御詔うけもちて 今ぞ答へむ高らかに 光は東我等より
- (4) ^{ばんだ}萬朶の桜雪の富士 ^ひ旭日に照り榮ゆる神の国 今ぞ答へむ高らかに 光は東我等より

『同声会報』昭和14年1・2月(第247号)に「乗杉嘉壽作」の歌詞が載り、同月28日の邦楽銃後奉仕演奏会で宮城道雄作曲により箏曲《東亜の黎明》が演奏された。同年5・6月の『同声会報』(第249号)に、今度は乗杉嘉壽“作詞”・安部幸明作曲のピアノ伴奏譜付きの斉唱の作品が掲載された。安部幸明作曲の詩は先の『同声会報』第247号のものと同じである。箏曲の歌詞は演奏会プログラムか楽譜での確認に今後も努めるほかないが、歌詞と邦楽演奏会プログラムが同じ号に載っているところから、同じ歌詞で宮城道雄と安部幸明が作曲した可能性が高いと考えられる。現状では《東亜の黎明》は、安部幸明作曲のほうは楽譜がありSPレコードにも録音されているが、箏曲の録音はなく、楽譜も確認には至っていない。

第247号の詩の下に短いコメントが付いている。無記名のため乗杉自身の言葉である確証はないが、時局に対する彼の捉え方が表れていると思われるので引いておく。「我等の世界的使

命は<道義の国日本>を中外に宣揚し以て世界を光被せむとするに在る。大東亜の建設も世界平和の実現もこの大使命の遂行に依りてのみ期せられると云へやう。この重責を負へる我等日本人の軒昂たる意気を吐いたものが即ちこれ。」今日でこそ大東亜建設の理想と現実について複眼的に論ずることができるが、乗杉はじめ当時の指導的立場にあった人々の多くは、大東亜の理想を己の信念として自ら鼓舞し、時局が緊迫すればするほど信念を強固にして事に当たろうとしたのではないか。

乗杉作歌には同じ曲名で別の作詞が行われた例もある。ともに昭和12年作曲で、一方は東京音楽学校選曲の斉唱《聖戦讃歌》、もう一方は中能島欣一作曲による箏曲《聖戦讃歌》である。歌詞の中に同一の明治天皇御製を含み、一部に同じ語句が使われるが、全体としては別物である。

次に、本稿に歌詞を掲載しない2篇にふれておく。

まず《学生歌》である。「本校学生歌作曲募集」と題する1枚の謄写版印刷が残っている⁸。「今般本校学生歌制定ニ付本校生徒ヨリ左記ニ依リ右作曲ヲ募集ス」「曲体 斉唱、合唱、調子、拍子等ハ随意」「期限 十一月末マテ」「応募者ハ其氏名記入ノ上上期日迄ニ教務課ニ提出ノ事」とある。

東京音楽学校の使命が国楽の創成にあることを掲げ、音楽学校生としての誇りを持たせ、学生への熱い期待と励ましがこめられている。校長自身を奮い立たせる感もある。

明治40年頃から戦後の昭和30年頃まで外部からの依頼に応じて約1000曲にのぼる校歌、社歌、市歌等の各種団体歌を作曲した東京音楽学校と音楽学部であるが、自校の校歌は今日まで持たず仕舞いである。全国の校歌を見ると、作詞は校長が自ら行うか、著名な国文学者あるいは詩人あるいは郷土出身の名士に依頼するかのいずれかが多い。応援歌にも使える学生歌の作詞に校長自ら乗り出したことは東京音楽学校の社会化とも言え、音楽学校を学校らしい学校に整えようとした乗杉の学校運営の姿勢の表れともいえよう。ただし学生歌の次に校歌を視野に入れていたことを示す記録はない。自校用の作歌はこのあと《東京音楽学校創立六十周年記念歌》に続く。

次に、慰問演奏の増えた昭和14年には《皇軍慰問の歌》(下總皖一作曲 『同声会報』昭和14年9月)が発表された。ハ短調、8分の6拍子、22小節のピアノ前奏のある、勇壮な曲である。SPレコードはビクターから11月に発売され、約100枚が校長から陸海軍第一線将士へ贈られたとある⁹。

以上、乗杉作歌の具体例を挙げた。彼はなぜ作歌を行ったのだろうか。理由ないし契機は色々考えられるが、その一つは、昭和6年5月に東京音楽学校が発行した唱歌集『新歌曲』の始終を見聞したことであろう。彼は作歌部と作曲部それぞれの部会によって進められる『新歌曲』の編纂に着手するにあたり、校長として編集の趣意を述べ、折々に進捗状況の報告を受けている。その経験が与えた影響は無視できないであろう。もう一つは昭和6年秋の欧米

視察が考えられる。彼が訪れた欧米の音楽学校長は皆、音楽家であった。乗杉は帰朝訓示のなかで、伯林国立音楽学校のシューネマン校長が生徒の演奏に色々注意を与えている様子に「上野の校長とは大分違ふわいと心私かに羨望し」^(ひそ)「音楽学校長たるもの須く斯くあるべし、と思はざるを得なかつた」^(すべから)¹⁰と吐露し、各国の音楽学校長が作曲家であり音楽家であって、社会の所謂名士のなかでも特に尊敬されていることにふれ、「日本にも世界並みの音楽者が輩出して、世界並みの学校長が本校を主宰する時代が早く到来せねばならぬ。余が本校に御縁のある限りは、此等の理想実現の為に^(ひっせい)畢生の努力を払はねばならぬと決心してゐる」¹¹と述べている。

乗杉の音楽趣味に関しては幸田延等とプライベートな余興で長唄の嗜みを披露したことが記録される程度であるが、もともと弁も筆も立つ。文部行政の職にあっても愛国心は並外れて熱かったが、その熱誠は今や音楽と音楽学校に向けられている。乗杉は音楽学校長に着任して以来、学校行事はもとより出張演奏、野外演習など生徒と頻繁に行動を共にし、東京音楽学校のほとんどあらゆる音楽シーンと共にあった。指揮や演奏でステージに立つことはなくとも、己の思うところを歌に託し、作歌を通じて演奏現場の一員たらしめたとは考えられないであろうか。彼の意図についてはあくまで推測の域を出ないが、少なくとも結果的にはそのようになった。

かつては伊澤修二東京音楽学校初代校長が《天長節》の他、『小学唱歌集』の数曲を作詞作曲し、《紀元節》の作曲を行っている。外山正一の詩に作曲した《皇国の守》もある。しかし、校長が作詞、すなわち具体的なメッセージを伝える言葉によって東京音楽学校の演奏曲目を彩る作品に参入し、東京音楽学校の名を冠した時局対応の作品を歌声や楽器にのせて校内外に響かせるということは、東京音楽学校開闢以来の出来事であった。しかしこれがまた、乗杉社会教育論としては東京音楽学校の演奏会をレコード録音やラジオ放送によって広く社会発信する方法の一つであり、日頃東京音楽学校生に説いている心得をより広く国民の務めとして届けることに外ならず、言行一致そのものであろう。乗杉は幾多の論文を物した人物であり雄弁家であったが、原理原則に縛られる理論家ではない。むしろ現場主義の人である。場に即した適当な方法があれば素早く採用して実践する。欧米に引けをとらない東京音楽学校たらしめれば、日本の音楽学校長も欧米の音楽学校長のように音楽の現場に身を置きたいと考えても不思議はない。日本でも明治の終わり頃から東京音楽学校卒業生たちによって創立されるようになった私立音楽学校の校長は必然的に音楽家である。東京音楽学校創立期には留学帰りの伊澤修二が初代校長を務めたが、以後、音楽学校長に音楽家が着任することはなかった。乗杉作歌が意味するものとして、彼が真の音楽学校の長たらしめる熱誠の余り、訓示や文章以外の新たな発信方法で東京音楽学校の演奏現場に参入したという側面にも注目したい。《日本青年の歌》などは気力と希望のみなぎる作歌である。乗杉作歌は時代精神の体現でもあった。時局に臨む彼の熱誠は、約70年を経た今日からすれば突出した感がある。

しかしながら、硬派ぞろいの乗杉作歌は社会教育論の実践の範疇であり、報国と御奉公以外の何ものでもなかったに違いない。

2-3b-5 創立60周年

乗杉校長着任11年目の昭和14年、東京音楽学校は創立60周年を迎えた。顧みれば50周年は着任の翌年であった。次の70周年には乗杉校長時代が終わり、彼は人生を終えている。御大典奉祝の気分に含まれていた50周年と異なり、60周年は紀元二千六百年奉祝のムードを先取りしている。60周年事業のあらましと重要な資料は『芸大百年史 東京音楽学校篇第二巻』に掲載済みのため、その補足と《記念歌》にふれておく。

『昭和十四年十一月 六拾周年行事書類』¹²に綴じ込まれた校舎図面によれば、教室の多くが幅広い招待客、儀式、演奏会に必要な控室として割り振られている。これにより招待者の概要も知れようというものである。校舎二階部分：照宮成子内親王殿下、降嫁華族御休憩室、皇族御休憩室、皇族御附、便殿、供奉官室、供奉員室、警視総監・憲兵司令官・近衛将校、供進室、文部大臣室・校長室。一階部分：警視庁先駆室、近衛兵室、宮内省自動車掛室、憲兵室、警察官室、海軍控室、児童控室、新聞記者室、男教員室、女教員室、箏出演者室、能楽長唄囃子方室、長唄出演者室、管絃楽部員控室、伝令室、救護室、第一～第六休憩室。

旧職員の招待者名簿に38名が記され、14名に出席の朱印が、15名に欠席の黒印が押されている。どちらも押されていないのは返事無しの意か。名簿にクラウド・プリングスハイムの名前があり、幸田延、アウグスト・ユンケル等とともに「出席」の印が押されている。故ハンカ・ペッツォルトの代わりに、寛永寺で得度した夫のブルーノが出席している¹³。

次に乗杉校長が東京音楽学校に託した思いを記念歌にさぐる。

《東京音楽学校創立六十周年記念歌》乗杉嘉壽作歌、下總皖一作曲

- (1) 国のほまれを音に^ね挙ぐる 我が国楽の創成は 尊くもまた大き業 我等が担ふつとめや
重し 勤めもろとも楽徒よ励め
- (2) 世におくれじといそしみし 五十路あまりを十年の 過ぎにしあとを眺むれば 我等が
向ふゆくてや遠し 奮へもろとも楽徒よ奮へ
- (3) 新しき世を拓かんと 聖き御業に従へる いくさ人にも劣らじと 我等が祈る誓ひや堅
し 尽せもろとも楽徒よ尽せ

国楽の創成は、音楽取調掛創設のため『音楽取調ニ付見込書』に掲げられた3項目、すなわち「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事」「将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スル事」「諸学校ニ音楽ヲ実施スル事」を継承すると考えられる。これらを建学の精神として再興し具現化したのが乗杉である。語句の一つ一つが東京音楽学校に託された乗杉社会教育論のキー

ワードである。それにしても「国のほまれを音に挙ぐる」とは、なんと遠大で高邁な理想に燃えたメッセージであろうか。官立音楽学校の崇高な任務を掲げて生徒一人一人にその使命を与え、自覚を促すこと、これは乗杉校長の訓示や式辞に共通する点であり、《六十周年記念歌》も例外ではない。国のほまれとなる音楽を創成する大任を謳い、楽徒を奮い立たせる。校長が音楽学校に夢と誇りと決意を託して生まれた記念歌の3節は、記念歌のための歌詞という以上に校長が東京音楽学校に対して本気で懐いていた思いであり、全身全霊を東京音楽学校の存続と発展にかけた日々からほとぼり出た言葉なのではなかろうか。国楽創成というつとめは音楽学校にとっては大層な重責には違いないが、そもそも国楽の定義も条件も達成基準も定かではなかったのではなかろうか。そこへ向かって邁進するのであるから困難さは計り知れない。音楽学校の生徒と11年を過ごした乗杉の眼差しは、今や音楽報国の道を歩み始めた同校の現実を見据えている。しかしここには微塵の憂慮も逡巡もない。戦線に劣らぬ命がけの音楽報国をせよとの熱烈な激励に終始している。

2-3b-6 建学の精神の具現化と乗杉社会教育論の行方

第2期bにおける乗杉社会教育論を象徴する出来事が、東京音楽学校学友会解散と報国団結成であろう。校長は学友会の「発展的解消」と称し告示する。「職員生徒ヲ挙ゲテ一団トナリ東京音楽学校報国団ヲ結成シ、以テ国家ノ期待、世運ノ要請に応ヘン」「文化ノ潮流ハ^(しんしん)駭々トシテ展開シ一日モ停滞スルモノニアラズシテ、大正ノ新ハ昭和ノ旧トナル」「将来ノ新シキ文化トハ何ゾヤ。一言ニシテ言ヘバ個人的ニアラズシテ国民的、懐疑的ニアラズシテ建設的、遊離的ニアラズシテ生活的、不健全ニアラズシテ健康的ナラザルベカラズ」「諸氏ガ過去ニ^(なづ)泥マズ個々ノ立場ニ捉ハレズ協力一致臣道実践ノ至誠ヲ捧ゲテ、心身ヲ鍛錬シ国民的性格ヲ錬成シ日本国民音楽文化ノ昂場に献身センコトヲ」¹⁴ 乗杉社会教育論はもともと大正デモクラシーに基礎をおき、社会が国家に優先し、家庭や個人を尊重することを原則としたが、ここに至って国家が社会はもとより家庭や個人を圧倒し、音楽報国という旗幟を鮮明にする。それは国情の変貌に官立音楽学校として応え、国家に協力し、国を支えるあり方に舵を切ったということであろう。

乗杉校長が時局に鑑み、このような舵取りを選択した根拠を解明するためには、彼が時局についてどのように理解し発言していたのかわかる必要がある。日清戦争当時に中学生であった彼は、日露戦争当時は文部省普通学務局にあり国民の精神総動員の仕事を担当し、青年団を組織して次代を担う世代の教育に力を入れた。また第一次大戦下の欧米に出張し、自身の言によればイギリス、フランスで空襲を受け、ドイツからの長距離砲弾に見舞われ、大西洋上で独逸潜行艇の襲撃に遭う等の経験もした。

支那事変後直ちに彼は文部省関係の雑誌で「一般国民は果してこの事変を正しく認識して居るであらうか」¹⁵と警鐘を鳴らす。日清・日露戦争は他国領土内の戦禍であったため一般国

民は戦争の恐ろしさをまだ知らないこと、支那正規軍の使用する兵器や飛行機が欧米製の最新式であるのに加え、支那の人々は過去十数年にわたる排日教育によって敵愾心に燃え、日本の何十倍の大軍と広大な地域に戦うこと、「支那一国に止まらずその背後にある大勢力を相手にせなければならぬ」「今度の事変は微妙複雑なる国際関係の動向から考へて我等の一生を通じて最も大きなものと言つてよい」と伝えている。昭和12年時点の彼の国際情勢の分析と予測は、大きく外れてはいなかったと言える。さらに踏み込んで、彼自身について、自分は一般国民として永きに亘り皇恩に浴し、官吏として寸功も無いのに国家から特別の恩恵を受けてきたので、御恩報謝のため「最後の御奉公はこの老体を戦場にさらすといふことであり度いといふ念願に駆られてゐる」と、50歳から70歳位の愛国の老志士達による老兵団として戦線に送られる道が開かれぬものかと述べる。また一般国民が長期戦に耐えるため「従来より二倍三倍の馬力」をかけて働くことが必要で、「堅忍不拔の精神で勇往邁進することが愛国の至誠」であると説く。

その一方で乗杉は戦争終結後に楽徒が担うべき使命についても述べる。「諸氏は戦後経営に於ては日本の音楽文化を以て東亜を光被し、この東洋音楽文化をして六十年に亘り撰取醇化して来た西洋音楽文化と融合渾一せしめ、そこに世界的普遍妥当性をもつ日本の音楽文化即国楽をうち建てる大任を負ふてゐるのである」¹⁶ 東西二洋の音楽から新曲創作、国楽創成への使命がここでも述べられる。時局対応に追われる中で、乗杉が戦後日本における音楽文化の役割を視野に入れていたことは注目されて良い。なぜなら実際、敗戦後の日本が平和立国として再建の道を探る時、文化芸術立国の要として音楽は重要な役割を担うことになるからであり、こうした時代背景と価値観に後押されて、本学は新制大学として再編され再出発したからである。

ここで一つの疑問が湧く。それは、乗杉において社会教育論と建学の精神と国家はどのような関係にあるのか、彼は学校運営において矛盾を感じていなかったのだろうか、ということである。それを解く鍵もまた音楽取調掛創設にあたって掲げられた3項目にあるのではないか。そもそも東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ることも、国楽を興すべき人物を養成することも、諸学校に音楽を実施することも、近代国家建設ないしは国造りと一体の事業であったといえよう。言い換えれば、東京音楽学校において、建学とは建国の一部であり、そこに建学の根拠もあったのである。すなわち近代国家建設を音楽と教育の側面から支えるという重要な部分を担っていたのである。したがって3項目を建学の精神として再興した乗杉は、時代の要請に即して国家に御奉公し、国恩に報いるというあり方を、消極的に受け入れるのではなくむしろ推進することによって学校の存続を確保し、音楽と教育の錬磨によって東京音楽学校が国威の核となる理想を掲げたのではあるまいか。このように理解することが、社会教育論的な発想もまた御奉公の手段となり得たことへの説明となるのではなからうか。

この時期の教育方針は概算要求書にも見ることができる。昭和15年度の概算要求増減額事

項別表に、甲種師範科修業年限延長並生徒増募、管絃楽部施設充実、選科生徒増募、外国語専任教官設置が並び、翌16年度は、音感教育研究施設、乙種師範科開設、国民音楽文化研究所が追加される。意外なようだが修業年限短縮の時局下、音楽学校側の数年来の要求が容れられ、甲種師範科は昭和17年度に従来の3年から「3年又は4年」、19年度に4年制に延長されている¹⁷。

2-3b-7 結び

以上見てきたように、第2期bは東京音楽学校にも時局の波が如実に押し寄せてきた時期であった。そうした状況下に生まれた乗杉の作歌は、とかく時局対応との一言で片付けられがちであるが、その実情は老兵団入りの叶わない一国民としてのやむにやまれぬ気持ちと、国難の一翼を担うべき東京音楽学校長が「最後の御奉公」との信念から行われたものと理解することができよう。日清・日露戦争で流行した軍歌は国民の士気高揚に一役買い、伊澤修二も小山作之助も鳥居枕も時代なりの音楽報国を行った。特に鳥居は《海戦史歌 海国男児の唱歌》¹⁸の長い詩を書き、約120曲からなる軍歌集《大東軍歌》¹⁹を編集した。それでもなお乗杉の作歌が特別な存在感を醸し出しているのは、「校長作歌」として東京音楽学校教員によって合唱曲（斉唱）や箏曲や長唄に作曲され、同校の演奏活動に組み込まれたことにより、乗杉校長の陣頭指揮をいっそう印象づけるからであろう。

もともと社会教育論のキーワードである「学校の社会化」は、個人を尊重し、かつ個人・家庭と地域・学校・社会の理想的な協働を目指したが、社会の大前提が国家である以上、社会教育論の実践は「音楽報国」と共振増幅する要素を多分に有していたと考えられる。伊澤修二が音楽取調掛創設にあたり建議書に掲げた3項目には、近代国家建設を音楽と教育の側面から支えるという役割が示されていた。昭和に入り、音楽学校生の洋楽の水準は明治期とは比べものにならないほど向上したが、官立の音楽学校が建国の重要な部分を担うという役割は、時代の要請で再び顕在化することになる。建学を建国に連なるものとして捉える時、乗杉時代の個々の学校運営は建学の精神の具現化として実像を現し、社会教育論のより現実 に即した実践として浮かび上がってくるのではなかろうか。

乗杉作歌は、熱弁・熱筆・演奏・録音・放送等々を通じて行われた建学の精神の具現化と社会教育論の実践の一環と捉えることができる。今日その熱誠と信念に隔たりを覚える最大の理由は、敗戦以後の内外情勢による価値観の激変であろう。こうして「学校の社会化」は、時局を先取りする勢いで大きく音楽報国へと舵を切るのである。

注

1 昭和15年に制定された富山県東礪波郡出町尋常小学校（現・砺波市立出町小学校）校歌。作曲は

岡野貞一。現在も歌われている。歌詞は二番からなり、砺波、立山、雄神川といった郷土ゆかりの地名、山、川を織り込んで学舎への誇りと愛校精神を詠み、一番、二番とも「学べばうれし ああ我等 つとめはげまん ああ我等」で終わる。音楽学校の《創立六十周年記念歌》や《学生歌》との共通性、類似性が多く認められる。本学に保管される作曲依頼関係の記録には同小学校とのやりとりは残されておらず、作詞作曲は小学校側が乗杉個人に直接依頼して行われたものである可能性が高いと考えられる。同小学校の記録によれば、昭和15年に紀元2600年を記念して制定され、同年8月17日の同窓会総会において演奏披露された。出町小学校教頭・牧野和則氏のご協力と資料ご提供に感謝申し上げます。

出町小学校への出張調査および校歌作曲に関する研究は、平成22年度科研費基盤研究B(22320034)「東京音楽学校・東京美術学校の受託作に見る近代日本の芸術教育」(研究代表者：橋本)の助成を受けたものである。

- 2 12月中の日付が特定できない事項についてはここに含めた。
- 3 乗杉嘉壽『社会教育の研究』東京：同文社、大正12〔1923〕年、2頁。
- 4 『同声会報』第235号、昭和12年7・8月、19頁。
- 5 『青年教育』第185号、昭和11年「青年学校に於ける音楽科新設と吾等の任務」15頁。
- 6 『同声会報』第232号、昭和12年3月、3頁。
- 7 注6に同じ。
- 8 『昭和十二年度本校行事関係書類』東京藝術大学音楽学部蔵。
- 9 『同声会報』第252号、昭和14年11・12月、3頁。
- 10 『同声会報』第181号、昭和7年3月、11頁。
- 11 『同声会報』第183号、昭和7年5月、4頁。
- 12 『昭和十四年十一月 六拾周年行事書類 第一冊 東京音楽学校』東京藝術大学音楽学部蔵。
- 13 同上。ブルーノ・ベッツォルトはハンカの東京音楽学校赴任に伴い来日し、旧制第一高等学校でドイツ語を教え、仏教研究者となった。
- 14 『同声会報』第258号、昭和16年1・2月、4頁。
- 15 この段落内の引用はすべて『同声会報』第236号、昭和12年9月、2～6頁(『文部時報』より転載)による。
- 16 『同声会報』第249号、昭和14年5・6月、5頁。
- 17 『昭和十五年度年度概算書 東京音楽学校』及び『昭和十六年度概算書 東京音楽学校』。
- 18 鳥居枕著《海戦史歌(海国男児之唱歌)》東京：東京元々堂、明治40年「佐世保出動」「旅順 口夜襲」「仁川港海戦」の3篇からなる。
- 19 鳥居枕編『大東軍歌』東京：大日本図書、明治28〔1895〕年。

Tokyo Academy of Music under the leadership of Norisugi Kaju, 1928–1945: Realization of its founding spirit and social education in practice (3)

HASHIMOTO Kumiko

This article represents an attempt to reevaluate Tokyo Academy of Music (Tōkyō Ongaku Gakkō) and its activities during the time when Norisugi Kaju (1878–1947) was its principal, in terms of how effectively it realized the spirit of its founding, and of how Norisugi put his ideas for social education into practice.

Although it was the only national music school at the time, Tokyo Academy of Music experienced various challenges to its continued existence and development during the years when it was led by NORISUGI Kaju, namely from 1928 to 1945, the year of Japan's defeat in World War II. During this time, it embarked on a number of social education programs that formed the basis for the development of the music culture that Japan enjoys today. At the same time, however, due to its unique position and role in society, it was also caught up in activities associated with the war effort.

With the exception of studies of individual musicians and concerts, Tokyo Academy of Music of this time has gained little attention in previous research. This may be because of negative ideas about the contributions it made to the war effort through composition and performances. Another reason may lie in the emphasis placed so far on the role played by Norisugi in pushing the school down the path of militarism, as a bureaucrat earlier affiliated with the Ministry of Education who often negotiated successfully with the military authorities.

In the period before and during the war, musicians of the Tokyo Academy of Music often appeared in concerts for the Emperor and his retinue, in an effort to overcome its somewhat weak social standing and establish its reputation with the country and its public. With the same aims, the school also publicized the achievements of its first principal, Isawa Shūji (1851–1917, principal in 1888–1891). As well as undertaking regular concert series outside of the school and traveling to different venues to give concerts on request, the school also arranged performances for radio broadcast, and established a major in composition. After Norisugi returned from a tour of inspection to Europe in 1931, he was instrumental in establishing the Ueno Children's Music School, the Japanese pioneer in early childhood music education. Within in Tokyo Academy of Music itself, a course in Japanese traditional music was established, and the increase in numbers of both staff and students at this time reflects its

growing role in social education. The peaks of its activities in these terms are its celebratory activities of 1940 (the 2600th anniversary of the country's founding) and its performance tour to Manchuria in 1942 in celebration of the 10th anniversary of the founding of the new state. In the four years before Japan's defeat in World War II, the school elevated the Japanese music course to a major, and added an extra year to the teacher training course, transforming it from a three-year course to a four-year one.

Earlier, as a bureaucrat in the Ministry of Education, Norisugi had worked in the administration of social education, establishing a department for that purpose within the Ministry and developing a unique theory of social education. His educational theories are currently being reappraised as the archetype for Japanese social education of the modern era. Throughout the pre-war and war years when he led the Tokyo Academy of Music, he consistently worked towards two goals: 1) realization of the spirit under which the school had been founded in the Meiji Era, ideals which he often returned to in his activities and writing; and 2) putting into practice his ideas for social education as summed up in his slogans "actualization of school education" and "school as society and society as school." Moreover, these goals worked effectively in the social context of the times, acting in coordination as Norisugi's guiding principles for management of the school's affairs.

Before making hasty criticisms of the educational policies of this time, we should be careful to gain an adequate understanding of how they worked. The ideas for social education proposed and realized by Norisugi still possess much of relevance for Japanese music education and its music schools today.